



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 275 号)

中曽根康弘と同志社

『中曽根康弘が語る戦後日本外交』より抜粋



昨年 11 月 29 日、101 歳で亡くなられた中曽根康弘元首相についてメディアは、政治的な功績を称えることを中心に書いていた。しかし、その元になることについては触れていない。

中曽根は、戦地に向かう時、限られた所持品の一つに聖書を選んでいる。また、中曽根は「母方の親戚が新島襄の遠縁にあたることもあり、私の場合、郷土の先輩である新島襄の影響が強いですね。」と書籍で語っている。

その書籍は、『中曽根康弘が語る戦後日本外交』で、京都新聞社の内田氏から小原克博先生に紹介され、フォロアーの小生にも情報が届いた。

関係する所を添付しましたので、ご参考まで。

『中曽根康弘が語る戦後日本外交』について



- ・ 著者／中曽根康弘
- ・ 編者／中島琢磨 服部龍二 昇亜美子 若月秀和 道下徳成 楠綾子 瀬川高央
- ・ 発行/2012年10月25日
- ・ 発行者／佐藤隆信
- ・ 発行所／株式会社新潮社

本書は、二〇〇九（平成二十一）年から二〇一一（平成二十三）年にかけて、七名の政治史・外交史研究者が、中曽根康弘氏から、計二十九回・五十六時間にわたり、戦後の日本外交を中心に聞き取りをし、まとめたもの。
編者及びその研究分野はつぎの通り。

- 中島 琢磨：日米関係、沖縄返還
- 服部 龍二：東アジア国際政治史、日中関係
- 昇 亜美子：日本の対東南アジア外交
- 若月 秀和：七〇～八〇年代の対アジア日本外交
- 道下 徳成：日本の防衛・外交政策、安全保障問題
- 楠 綾子：日本政治外交史、安全保障問題
- 瀬川 高央：八〇年代の防衛政策、米ソ核軍縮交渉

於、砂防会館・中曽根康弘事務所にて

.....

p. 29

・ 第1部 首相就任まで 第一章 培われた外交意識 生い立ち

服部 これより戦後の日本外交について一緒に振り返っていきたいと思います。その前に、

まず先生の生い立ちと中曽根家の系譜について言い伝えを教えてください。

中曽根 おそらく中曽根家の先祖は、武田の家臣ではないかと思います。群馬県、高崎の北に、昔は箕輪村と呼んでいたところがあり、そこに箕輪城がありました。城主は関東管領上杉憲政の配下の長野業(なり)正(まさ)でした。一五五四(天文二三)年頃から、この箕輪城を武田信玄の軍勢が、信濃(しなの)(長野県)を通り碓氷峠を下って度々攻めに来ていたのです。当時あの辺りは、北条氏、武田氏、上杉(長尾)氏が争って領主が入れ替わるような土地でした。今でも箕輪城の空堀や石垣などが残っていますよ。

初め、武田軍は目的を達せずには一部は引き揚げたのですが、一部は上野(こうずけ)(群馬県)に残留して、そこで帰農した集団があった。群馬郡(二〇〇六年に消滅)に字名が「神山」という所がありますが、私の先祖は、神山付近に残留して、帰農した武田軍の一族のようです。私の父の本家は、その群馬郡の榛名町(現在は高崎市)にあります。上里見村神山から、本家の長女のところに婿入りしたのが、私の高祖父かな。そして同じ村の少し離れたところに居を定めた。それで中曽根と称しておりました。今でも、その家には武田菱の石碑が残っています。だから武田に間違いはないんだろうと思います。

私の家は山林を持っていました。それで高崎へ出てきて、材木商を営んでいました。自分の山林の木を切って、製材・販売する材木商を興したわけです。私はその家の次男坊に生まれました。上州の豊かな自然は、志や野心のある青少年に感化を与えてくれましたね。

服部 ご両親はどのような方でしたか。

中曽根 母親は、安中の割合に素封家中村という家に生まれて、前橋にある共愛女学校というキリスト教の女学校を卒業していました。だから、私は子供の頃、風呂へ一緒に入れられて、母に賛美歌を教わったものです。今でも賛美歌を口ずさむことができるのはそれゆえです。私も母もキリスト者ではありませんが、安中は新島襄が出たところで、キリスト教が盛んな環境に母親は育ちました。私も高校へ入る頃には聖書を読んでいましたよ。これは母親の賛美歌の影響です。今でも「山上の垂訓」あたりが一番好きですね。

母方の親戚が新島襄の遠縁にあたることもあり、私の場合、郷土の先輩である新島襄の影響が強いですね。幕末にアメリカへ抜け出し、アマーフト大学で勉強し、帰国して同志社を開いたという先覚者のキャリアと足跡に感銘しました。新島には、同志社の学生が悪いことをした時に、学生を鞭打たずに自らの手を棒で打ったというエピソードがあるが、私や群馬県人にはそれが一番胸に響きましたね。人を責めないで教育者自身の責任とする崇高さに、上州人の精神というか、仁義を感じました。それで、キリスト教に傾倒こそしませ

んでしたが、その後も哲学青年となり宗教にも関心を持ち続けました。

昇 のちに国際的に活躍されて西洋文化に触れる時に、キリスト教の知識が役立つ機会もあったのではないのでしょうか。

中曽根 それはありましたね。「聖書」という人類にとっての偉大な書物は、私の人間形成に役立っていると思います。外国要人に会った場合にも、聖書を読んでおいたおかげで、わからずに相手にへりくだることもなかったし、また、相手の話を尊重することもできましたからね。 p. 31 (中略)

.....

<多田付記>「中曽根はその後、海軍経理学校に入学。海軍主計中將になっている。太平洋戦争が開戦、呉港から 2000 人の徴用工員を連れて「台東丸」で東南アジア方面に向かった。」

第一章 培われた外交意識

p. 50

中曽根 「台東丸」という徴用船に乗り込み、積み込みの指揮をして、七〇万円の軍票を持って、しばらく待ってから、船はようやく汽笛の音とともに十一月二九日に出港しました。私はその時、主計長の部屋の一隅に一人で佇んでいたが、涙が溢れ出てしょうがなかった。それまでの人生でそれ程涙が出たのは、母親が亡くなった時ぐらいだった。あの時は「俺は日本の海軍将校として最善を尽くして準備し、仕事をやった。これは他の奴にはやれない、国家に忠義を尽くした」という思いが全身に充満して、涙が溢れ出たのだろうと思う。今思えば笑われるけれども、開戦前夜の青年士官の思いはそういうものであったね。何しろ着任、編制と資金計算、引き取り、名簿の仕上げ全てを一週間でやったのだからね。

戦地に赴く際、士官は行李一つ分の荷物が許された。それで私は聖書とお茶の本『茶味』、シューベルトの歌曲「冬の旅」の円盤を持って行った。「冬の旅」はもう聴くことはないと思っていたが、一ヶ月半後、占領したバリクパパンにあったオランダ人の別荘で、そこに残された蓄音機を見つけて思い掛けず聴くことができた。聖書と「冬の旅」、この二つは戦争の忘れられない思い出です。

徴用工員の大奮闘 (後略)

.....
p. 61

第二章 終戦直後と吉田外交 役所に辞表を提出

服部 矢部貞治氏の帰郷運動と中曽根先生の青雲塾の結成には、通じるものがあったのでしょうか

中曽根 ありましたね。しかし、矢部さんに言われて群馬に帰ろうという気が起きたのではないね。それはやはり、戦争が終わって、日本が荒廃に帰したその時、たまたまマッカーサーが一九四六年に公職追放令を出して、既成政治家がほとんど追放されてしまった。群馬県にも選挙区が一部空く状況が出てきて、それが出るチャンスだと思ったのです。群馬県も、木暮武太夫とか古い政治家が追放されて、男の候補者も出たけれども最上英子という女性の候補者が戦後初の総選挙（一九四六年四月一〇日投票）に出て当選したんだね。このチャンスを逃がしてはダメだと思って行動した。

第二回の総選挙が一九四七年にあったわけだが、その前に私は、内務省を辞めて選挙に出る意思を父に何回も手紙を出して訴えていましたが、その都度、反対されていました。

しかし、結局総選挙の前年の一九四六年の12月に、私は父の反対をよそに、内務省の役人を辞めて、青年運動を起こすと言って柳行李を担いで高崎へ帰ってしまったのです。それで父もしょうがないと諦めた。高崎の家に帰って、占領下で禁止されていたが、まず、小さな庭に棒を一本立てて、日の丸を揚げました。戦後のあの頃は地方では割合に余裕があってね。青年団運動というのが非常に活発で、各町村とも青年団がいろいろと会を作ったり、人を呼んだりしてだね、それに乗っていったわけだ。それから私は青年団を中心にあちこちで演説をやらせてもらった。あの頃は青年団が演説をうんと楽しんでいました。

p. 62

それでまず、青雲塾という本拠をつくった。思想運動の本拠をつくる必要があったからね。塾の「綱領」「修学原理」「わが宣言」を作り、高山彦九郎とか、関孝和とか、**新島襄**、新田義貞とか、そういう郷土の偉人の肖像を掲げた。そして、「群馬県よ、青年達よ、立ち上がれ」という話を演説してまわったのです。（後略）

.....『中曽根康弘が語る戦後日本外交』より抜粋はここまで.....

以上